

大正十年一月廿三日

日本鐵工株式會社

取締役會長 中村 愛作
専務取締役 佐野 甚之助

東京鐵工組合

日鐵支部委員殿

然れども罷業は廿五日解決したるを以て、此覺書は其効力を發揮することなくして終れるも、翌廿四日の重役會に中村社長が此覺書問題に就て「あゝ云ふ風に出られると勝手にしろと云ひたくなる」と其夜の餘憤を洩らし、更に解決の翌日職工團に對し「先日捲き上げたものを返し給へ」と云へる口吻に依りても、其夜の狀況を想像するに難からず。

△鈴木文治氏の斡旋中止

會社は十七日工場閉鎖の際に、職工代表に對し「第三者の調停に一任したし」と云へるが、第三者とは必ずしも組合員の一切を避けたるに非ず、日鐵支部以外の人を指したるものと解釋するを得、即ち會社の意嚮は友愛會にても鈴木會長、棚橋東京聯合會主事の如き高級幹部ならば調停を一任するも

可なりと爲し、左右に私かに其意を洩らしたり、當日佐野専務は「余は久しく鈴木文治氏宛の紹介狀を持ち居れり、此際鈴木氏に面會して事件解決の目鼻をつけたし」との意を中村常務に洩らしたり、常務は社長及専務が鈴木會長に會見することに賛成し、其爲に盡力すべしと引受けたり同日午後中村社長は協調會に小林勞務課長を訪問し「鈴木氏と會見して見たいと思ふが如何」と意見を求めたるに對し小林氏は「事件の當事者としてのあなたは一人にても多く會見し諒解を得るの要がある」と賛成し佐野専務も亦之を勸説したるため社長も遂に同意せるものの如し、同夜鈴木氏と中村常務の會見あり、鈴木氏は「私とジョン、マカウレー氏との關係マカウレー氏と福澤翁との關係を思へば中村社長と私とも何かの因縁があるようにも思へる事件を此まゝに捨て置くときは如何なる大事を生まんとも豫測することの出来ない今日、社長と會見して何とか話をして見たいと思ふ、但し私共の友愛會本部のためには日鐵支部は支店であるから、居仲調停は出来ぬ、私は利害關係なき第三者では決してない」と語り茲に兩氏の會見に依り或は新局面開かるべしとの豫想を起したり。

然るに十九日佐野専務は中村社長の意志なりとて、此際社長が鈴木氏と會見することは見合せたき由を中村常務に傳へたり中村常務は會見の必要を佐野専務に説き、更に自ら社長に之を勧めたり、社長は「鈴木氏が友愛會長として調停の任に當ると云ふことでなくたゞ會いたいと云ふことなら考へて見よう」と云ひ一方鈴木會長は「會ふならば廿日午前中に願ひたい同日は一日宅で待つ」と答へたり、